



余計事



川崎ゆきお

余計なことをしているときの方が、メインの仕事が捗る。というより、安定している。メインの仕事が捗らないので余計なことをするわけではないが、メインは退屈なものだ。それだけに安定している。また安定させないとメインとは言えない。そのため、踏み外したり、方針を変えたりとかは迂闊にはできない。そんなとき、メインではない余計なことをすると、しばしメインから離れられる。メインばかりをやっていると、自家中毒を起こす。倦怠感とか、閉塞感だ。

メインの仕事なので、より快適な、またはより将来を見込んだ方法を模索するとかでもいいのだが、ある程度それが終わると、あまりやることがない。現状維持だけで十分なためだ。それでは刺激が無いのだが、メインを弄るのは危ない。メインに対してサブという考えがあるが、そうではなく、ジャンルが違うのだ。またそういうものがなかったりするし、さらに職として、仕事として成立しないこともある。そういうメイン以外のものを余計なことと呼んでいるが、余計事であっても、それなりに難しく、メイン以上に苦勞することがある。そこでドタバタしているときの方が、メインの調子がいい。というより、メインは安定しているため、ドタバタしないためだろう。それこそ余計なことを考える必要がない。

それで、余計事の合間にメインの仕事をするとき、悪い感じがない。本来なら退屈なものなのだが、逆にほっとしたりする。ただ、それほど快適なわけではなく、いつもの仕事をいつも通りやるだけで、大きな喜びもないのだが。

「妙な仕事方法ですねえ」

「メインを弄らないで、他のことを弄るわけですよ。それで揉めますがね。問題が出たりとか、色々。しかしメインじゃないのだから、まあ失敗して壊れてもいいんです。それに惜しいとも思わなかったりしますから。何せ余計事なんだから。だから、余計事の方を気にすれば気にするほど、メインについてはあまり気にならなくなる。これです」

「しかし、余計なことをしている時間、メインの仕事をしている方が効率がいいでしょ」

「実際、一日の中で、どれだけ本当に仕事をしているかです。ほんの数時間、数十分かもしれませんよ。大事なポイント箇所は」

「ああ、はい」

「だから、時間が余る」

「私、忙しいですが」

「メインの仕事に余計な手間をかけるからですよ。またはメインを増やしたりしていませんか。メイン箇所でも余計なことをするからですよ」

「ほう」

「だから、メイン外で余計なことをするのがいいわけです。これはメインに影響しません」

「しかし、時間が」

「確かに時間を取られ、メインの時間が短くなる。これが刺激になる。短い時間にさっさとやっ
てしまう、あるいは無駄を省いて、必要箇所だけに徹する。まあ、早く終わらせたいので、手を
抜くわけですがね。それは余計なことを早くやりたいからです」

「メインでの手抜きは」

「最低限のことをすればいいのですよ。抜くわけじゃない。メイン箇所での余計な手間を整理す
るわけです。やらなくてもいいような箇所もあるでしょ」

「いえいえ、それは職種にもよりますよ」

「まあ、そうなんですがね」

「要するに仕事ばかりしていると煮詰まるので、遊びましょうと言うことですか」

「平たく言えばそうなんですが、あまりメインばかりに集中しているより、目を逸らしている
ときの方が上手く行くんです。メインなので、もう慣れたものでしょ」

「目を逸らすのですか」

「そうです。逸らしていても、自動的にできるでしょ」

「はいはい、手順は黙っていても、いつの間にかやっています。意識しなくても」

「そうでしょ」

「ところで」

「何ですか」

「余計なことって、何ですか」

「それは任意だ」

「はあ」

「好きなことですよ」

「ああ、趣味のような」

「そうそう。そっちに気を取られているほど、メインは安定しています」

「その理屈が分からない」

「まあ、メインが楽しければ、余計なことはしなくてもいいんですよ。問題は長く続けていると
、飽きてくる。ここからの方が実は大変なんだ」

「そうですねえ。細かいことが気になったりします」

「だから、そのエネルギーを余計事に向けさせ、そこで発散させるわけです。理屈的にはね」

「はいはい」

「分かりましたか」

「いいえ」

人にはタイプがあり、同じようにできない人も多い。

了